

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

中世秋田武将の諸相 五代の家学を受けるという佐藤信淵 脱藩と江戸追放、秋田冷遇の平田篤胤

はじめに

本年度前期のテーマは「秋田の中世武将と近世学者」であり、後期のテーマは「秋田近世学者」であった。5月20日は「秋田の中世武将の諸相」、6月17日は「五代の家学を受けるという佐藤信淵」の1、7月15日はその2であり、後期の前後は、9月16日の「脱藩と江戸追放、秋田冷遇の平田篤胤」、10月14日はその2であった。

中世秋田武将の諸相

建保6年(1218)3月の條に『吾妻鏡』は「出羽城介藤景盛」と記している。藤原氏で名字は安達で、北条氏との血縁が近く、幕府の重視していたことが示される。秋田地方においても鎌倉幕府5代の執権である北条時頼が北秋の釈迦内に「一七山釈迦堂」を、土崎に「二七日山光明寺」を、山北に「三七日山西明寺」を建立し、秋田城支配地域の重実を図っていた。

彼は、源頼朝の妻政子の兄弟である権力者義時の孫で然るべき人物であった。

中世武家社会で「秋田城」が重視されていたことは、当時の朝鮮で製図された日本地図の中にも明記されている程であることでも理解できる。その資料は東北大学に所蔵されている。

近世に近づく天正3年(1575)に「秋田城介」に任じられた権力者織田氏の信長の嫡子信忠について、『信長公記』に「かけまくも忝し、天帝より御院宣を蒙り、秋田城介に任ぜられる。御冥加の至り也」と書かれている程、秋田城の存在は中世武家時代に重視されていたのである。

秋田自体の勢力として能代港や男鹿に拠点を置く、津軽から南下の海運力に重点を置く安東氏は、秋田の在地勢力の中で卓越した勢力であったが、由利には勢力進出はしなかった。

今の県南では平鹿の平鹿氏、仙北の小野寺氏・本堂氏・和田氏・六郷(二階堂)氏などが居り、

由利には「由利十二頭」なる小勢力の領主達が著名であった。

仁賀保には、一方の雄とされる仁賀保氏という小笠原系の領主が居り、同じ小笠原系の赤尾津氏が衣川流域赤尾津から河口部北を領地としていた。鮎川流域には平氏系の鮎川氏が居り、石沢川流域には小笠原系の石沢氏が、岩谷地方には小笠原系の岩谷氏が居た。

元和9年(1623)に矢島を領した打越氏も打越地区を領したのであるが内越とも表記された。小笠原系である。同じく小笠原系の湯保氏が西目湯周辺を領した。子吉川流域は藤原系の子吉氏が領した。

高瀬川流域は下村氏が領し、子吉川中流域は由利氏後裔の滝沢氏が由利五人衆として支配し、到米(玉米)は小笠原系玉米氏が支配した。鮎川流域は羽川氏が領したが、羽川は安東実季の部下となるという特殊の動きを示した。矢島は、矢島氏(大井氏)が領したが、領域の故もあり、由利の一方の雄たる存在であった。

五代の家学を受けるという佐藤信淵

雄勝郡で明和6年(1769)に生まれた彼は、高祖父歛庵信邦から、元庵式行-不昧軒信景-玄明窩信季-松庵信淵と連なるが、歛庵信邦の養父は32代信正であり、雄勝・由利地方に居住する佐藤一門は25代式信からであり、その祖先は奥州から移住して来たもので、奥州では源氏の義経が鎌倉の兄から平泉に逃れて、平泉に居住した際の忠臣佐藤継信から出ていると伝えられ、義経の死後にも東北から離れなかったのだと伝えられている。

歴代が学者で、信淵までの五代で250部758巻の著述があるといい、信淵自身が205部565巻を著述したというが、実態は不明であると言える。

*秋田県立博物館

信淵の通称百祐で、母は蒲生氏の出である貞静であるが、父信季と母の間に丑之助・さきという2人の子供が生まれたが、夭折してしまったので、父が46歳、母が34歳の時に生まれた百祐は、期待のもと養育された。

だから、13歳の少年期に父に伴われて天明元年(1781)から2年に亘って、北海道・樺太に研究旅行をしたという。帰途もすぐ雄勝には帰らず、津軽・南部・仙台・相馬・二本松などと見学して、小安峠を通り暮れに帰郷したのである。

家系にも両親にも恵まれた彼は、自身も素質ある少年であった。訓育の為であったであろう寺に学習のために入れられたが、彼は「仏学」を好まず脱出した。家には帰らず七高山という山の神社に立て籠もり、強く反抗の姿勢を示した。若い時私も登ったことがあるが、山は高さ304メートルで、今も神社は地元の崇敬を得ている。少年期から彼は崇仏ではなく敬神の心を持っていたのであろう。

天明3年(1783)8月15日、父信季が藩から追われることが生じ、母は井戸に投身自殺をはかったが叔父式正の説得もあって脱出したが、父も自殺を考えたが説得に従い信淵と共に藩領を脱出し江戸に出た。

江戸では父の知人である津山藩士の三原金太夫を頼ることになり、彼は藩主侍医の宇田川玄随に入門し勉強することになった。

間もなく父は日光から足尾銅山に赴くことになったので、彼もそれに従ったが、父が病気に伏し、やがて「帰郷はせず江戸で学び、家学を大成せよ」との遺言をし亡くなる。彼はそれに従い、勉学を続けることになった。

玄随は蘭学者として名のある人であるから、三原家に寄寓して学んでいた信淵も、多くのことを学んだに違いない。只彼には故郷に住む母に対する恋しさが強さを増していた。天明5年(1785)春、17歳の信淵は母の許に帰郷した。だが母に教訓されて帰学のため江戸に戻った。

師が美作国津山に帰藩することになり、彼もそれに従った。師は松平藩主に彼を「世に稀な秀才である。」と評価した。

彼はこの機会を西日本の遊歴に活用して、山陽

道諸国から九州の南薩摩藩迄訪れ、江戸に帰る途次に信州を通り、飯山を経過した。

天明7年(1787)津山藩主に『警三僂策』を献上し、高く評価されたことにより、「百石任用」の沙汰を告げられたが、老母が出羽在郷を理由に辞退し、更に『幣政改革記』を献じ、同8年に宇田川塾を退塾した。

この際に津山藩江戸屋敷では彼に対する盛大な送別会が行われ、餞別百両が贈られ帰郷した。母に30両・貧しい一族に米を贈った。

しかし、郷里は彼の仕事場にはならなかった。寛政2年(1790)また西日本の旅に出て久留米で年を越したという。瀬戸内などで水戦法の軍事書を採訪した。3年には中国地方に渡り周防では熊谷家伝の砲術を学び、安芸から東に東山道を進み土木開墾の指導を行い、河内国では鴻池善右衛門家の開墾について、新田2万石の開墾に寄与した。

寛政4年には江戸に入り、京橋柳町で医者を開業した。24歳であった。一宮藩主の要請で上総国で地引網漁業の指導をした。翌年江戸に戻る。

寛政6年(1794)26歳で上野の寛永寺坊官娘である笹原いせ20歳と結婚し、翌年帰郷し母を伴って江戸で共に生活、孝養を尽くしたが、3年にして同9年4月21日、母貞静は62歳で死去した。彼は母が田舎から初老にして江戸に移り生活に苦勞したのではないかと嘆き、健康を害するに至ったので、門人の白井喜右衛門は案じて上総国大豆谷村の素封家木村久右衛門に彼を預けた。

次第に大豆谷への定住性が安定し、住居の近くに大空洞を伴う老松があり、大松下という地名も生じていたが、彼はこれを愛し「松庵」と号し、農牧・水産・医術の学者生活を続けた。

文化4年(1807)、39歳で江戸に戻り医業を営んだが、ロシア船の北海出航で海防論が流行し、彼の兵学が注目され、徳島藩士集堂勇左衛門に求められその帰郷に同伴、文化5年に阿波国に迎えられた。

淡路島の疲弊を観た彼は重農主義の立場から進言をしたが、依頼によって家学伝来の兵学を發揮、武器製造も行い「行軍砲」「自走火器」などを造った。

文化6年6月に江戸に戻ったが、幕府の若年寄や長崎奉行までが教示を求めて来た。安住は難しいと考え、家族を移してから自分も7月13日に江戸を離れて大豆谷村に退去した。菊栽培などを楽しんだという。

そこに郷里久保田藩から財政改革について諮問を受けるという画期的なことが起こった。江戸藩邸で直接対応した藩士は、瀬谷勝明・熊谷実元・関口重遠らであるが、桐齋の号で知られている瀬谷は文化8年に国元に帰任し、後に明德館祭酒になる人物なので、熊谷・関口の信淵対応になるが、信淵案は秋田米の江戸送りなどを東廻り海運にすべきというような積極策なのに、藩や商人の理解は得られず、結局は藩は対応できずだった。

不満に彼は、家老匹田松塘に『奉呈松塘匹田君封事』を呈し、「小生の頸を斬り以て幣政を更革し」という極端な語の文言を呈した。

文化10年(1813)江戸日本橋富沢町で医業を営み12年には平田篤胤と吉川源十郎に年長の身で弟子入りをし、国学の学習研究を行い、文政2年(1819)に『天柱記』(天之御柱之記)・同5年『天地鎔造化育論』・同6年『宇内混同秘策』などを著述した。

同13年吉川源十郎の募金活動に荷担したことの不法活動を問われ2月14日、揚屋入りとなった。病気で3月17日出牢を許されたが、「品川・板橋・千住・四谷、大木戸より内御構、本所・深川、但し町奉行所支配場限り、右の場所徘徊すべからざるもの也」と12月27日付の処分を受けた。主として深川に住み、天保3年(1832)11月、日本橋材木町の長男昇庵宅に病氣見舞いしたことで、「江戸十里四方追放」処分を受け、足立郡鹿手袋村の村田名主に止宿することになる。実際は、門人永堀家の土蔵の二階で暮らした。

天保8年(1837)弟子の渡部崋山からの依頼で、三河国田原藩で藩士に耕種法の講義をした。しかし、この地では前年もこの年も大風塩害を蒙っていたので、信淵学も速効をもたらし得なかった。

翌9年には、四男の祐三を伴って沼津藩領を巡り指導し、天保11年(1840)には72歳で祐三と3月末に綾部藩を実地に見る主目的で西国に向かい、伊勢・志摩・伊賀・大和・山城を経て4月

末目的地綾部に到達した。

領内の基本調査をし振興策を樹て社倉(報恩講)を結成した。9月後半に江戸に帰ったが、翌年は盛岡藩から召し抱えの誘いがあり断った。弘化3年(1846)將軍家斉三回忌による赦免で「江戸払」は無くなる。『復古法概言』などを著したが、水野老中の失脚で注目されなかった。

嘉永元年(1848)81歳で『陸戦法秘訣』などを著述していたが、翌秋病床に就き、酒だけで百日余を生命を保ち、嘉永3年(1850)82歳で逝去。

久保田藩出身不遇の国学者平田篤胤

安永5年(1776)8月24日朝に、久保田城下中谷地町中丁の100石取りの大番組頭大和田清兵衛の四男として生まれ、正吉と命名された。『大壑君御一代略記』^{だいがくきみごいちだいいりやくき}によれば、8歳で中山菁莪に入門、11歳で叔父柳元に医術を学び、玄琢と称したというが、自身が晩年に書いた自伝に依れば、幼くして足軽家に養子に出され6歳で戻され、8歳で鍼医桜井氏に養子に出されたが、11歳で養家に実子が生まれてまた実家に返され、親兄弟に邪魔者扱いにされたという。

大学者が少年時代愚かな筈はないから、説話であろうと言われて来たが、不遇は広く伝えられた。寛政7年(1795)に正月から久保田を離脱して江戸に向かった。

江戸でも武士身分を問題外にする生活も続けていたらしいが、寛政12年(1800)8月25歳で一転機を得た。備中(岡山)松山藩士平田藤兵衛篤穩の養子になったのである。

養父の篤と実父の胤を名乗りに用い、平田半兵衛篤胤となったのである。既に相愛の中であった石橋織瀬と結婚もし、やがて2男1女の父となったが、長男は2歳で幼死し、夫人は文化9年(1812)、8歳の長女・5歳の次男を遺し31歳で世を去るのである。さらに、文政元年(1818)次男又五郎も11歳で幼死してしまう。

この年迎えた後妻にも「織瀬」を名乗らせ、文政7年(1824)に父の弟子碧川篤真と結婚した長女千枝子は、成長しお蝶(長)を名乗っていたが、継母の死後は三代目織瀬を名乗る。篤正は平田鉄胤となる。

享和年中（1801～1803）に古道学（国学）に開眼した篤胤は、その研究と著述に没頭して、文政6年（1823）には松山藩を致仕し、医者元瑞として家計を立てていたが、国学者としては名声を得て、入門者も多かった。

天保3年（1832）から故郷久保田の佐竹藩への帰参運動を続け、同9年（1838）にようやく望みが叶うが、禄も藩務も無かった。

天保11年（1840）12月30日に幕府の老中掛川藩主太田備後守から、佐竹藩の江戸留守居役に「平田大角を早々国許に差遣せ」と命令が下される。

藩は翌日の元旦に平田本人に幕命を伝達し、天保12年1月11日には江戸を出立し、13日に佐竹領の下野国仁良川に到着し、滞在して4月5日に仁良川を出発し、4月16日に横手の弟手賀主水方に到着した。

藩庁からは特に対処は無く、11月にようやく「藩旗本」として召し出され、「十五人扶持金十兩」を与えられた。だが、その中の「八人扶持」は江戸在住の子孫に与えられたので、久保田の老夫婦と下男2人の在宅には六人扶持で、当時の藩制度では1日5合で、年にしても「一石八斗」であった。

尚、一緒に暮らしている織瀬夫人の日記によると、公的な「講義」は無かった。大学者として江戸でも注目されていた彼に、藩は公的な講義をされることは無かった。

郷里で大学者として彼を支持するのは、藩では長老級の小野岡父子・梅津父子・小野崎父子などの文化人で、藩主に近い勤務をしている御用人・御膳番・御納戸役などは好意的ではなかった。

それには江戸では初めは仲も良かったが、彼が業績を上げると論敵に変わってしまった、若狭国伴信友の弟子筋の高階（橋）靱負の平田に対する言動により、平田の価値が藩主周辺には伝わらなかった結果を招いていたことも、大きく作用していたと考えられる。

平田の国学に関する業績については、松阪の本居門人たちの評価も二分していたが、国学の神道関係、国語国文関係・仏教関係・医学関係の多方面に亘って、養嗣鉄胤は「著述の書凡そ百余部、巻数千巻に近かるべし」と総括しているが、その

努力成果は極めて大なるものがある。

平田が床に就いて睡るのは月に「六斎」だけで、他は袴を着けたまま机に寄りかかっていたの仮眠であった。服部中庸の書簡の中にも著述中は5日も6日も人と面会しないと、書見著述にかかると20日も30日も昼夜寝ることはなく、眠ると3日も5日も飲食もせずに寝ていて、覚めるとまた同じように仕事にかかると記している。

ややもすると彼は自尊心高く、他にも強く対応するように考えられるが、本居太平は彼を「いと物やかなる男にて、顔つきも柔和にうち笑みつつ物言う」と評している。

平田の対人関係は強圧的であったと考えられ易いが、自分も昭和30年代初期に、今は横手市の平鹿郡大森町八沢木の友家蔵の、文化四年三月一四日付の友直江宛書状を読んだことがあるが、文言柔らかで謙遜の表現に感じ入ったことがある。

平田は研学が深まれば深まるほど学説も動行も朝廷への大義忠節が絶対唯一になる。それは、將軍を頂点にする幕府や佐竹藩の忌避が深まることになる。

結局彼は天保13年（1842）には、「我等帰府のこと百に九十九まで出来ぬ。書物は皆なくなり、借金で首も回らず、例えば手足を切って秋田に投げ捨てられたようなものだ」と鉄胤への手紙に書くようになる。腕痛の宿痾も甚だしくなったようである。

天保14年3月には、在秋田の家政苦を日記に書き続けた織瀬夫人が大病になり、6月に看病のため二男鉄弥と従僕鶴造を伴い鉄胤が久保田に着いた時は、夫人の死は危機を脱していたが、篤胤本人が重病になっていた。

大学者大神道家篤胤が9月19日「おもうことの一つも神につとめ終えず今日やまかるかあたら此の世を」と辞世の句を詠み、天保14年閏9月11日夜68歳で生涯を終えた。神式葬の実質ながら、形式的には僧の引導を受けた仏式葬であった。

明治維新に向かう時勢で国学も平田の業績も評価されるようになり、歿後20年にもならない文久元年（1861）武蔵国に彼を祀る「秀枝神社」が建立され、各地にも彼を祀ることが及んでいた。

明治になって後継者鉄胤もその子延胤も明治天皇の侍講を務めた程、「平田学」は評価尊重されたが、久保田で若い日彼に会って易学のことで詰問した経験のある根本通明は、「目玉は極めく鋭かったが言葉は非常に柔らかで眼付とは反対に誰にでも優しくかった」と回顧している。

明治14年(1881)に天皇東北巡幸の際に勅使が差遣される社は無く、手形山の彼の墓前に勅使は赴いた。このことを明治の秋田は強く請け止めたであろう、八橋の日吉神社境内に平田神社を建てた。

公的にも県の機関も判断を表し、明治42年(1909)秋田県教育会は秋田市東根小屋町に『弥高神社』を建立し佐藤信淵と合祀した。大正5年(1916)千秋公園に遷座し、広く崇敬されることになる。